

浄土

monthly
JŌDO

1998 November

11



テレコムしよう。

 コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

申し込み、お問い合わせは  **0088-82** (無料)

【受付時間】9:00～23:00 (年中無休)

インターネットホームページ: <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の心の故郷を紀行する。

山口・大日比

西園寺



まさに念佛道場にふさわしい本堂



入り口が左右にしかない西廻寺本堂



山口・大日比
西圓寺



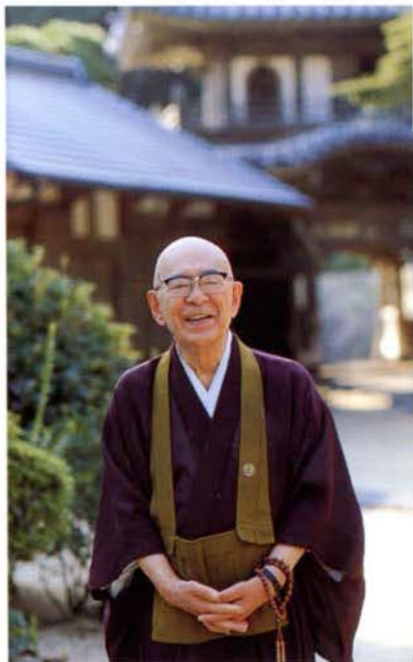
世界最初日曜学校発祥の地の記念碑



大日比三師の名号。
右から法岸、法洲、法道の書



仙崎港に立つ親子の鯨像



西雲寺第二十二世綿野得定住職

大田比満へ、向いの山腹に見えるのが西雲寺



浄土

1998/11月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行「西園寺」	写真＝タカオカ邦彦	3
ファインダーの中の仏教	藤田庄市	8
新連載 民間の伝統芸能と宗教	川元祥一	16
寺院紀行 山口・大日比「西園寺」	真山 剛	22
表紙は語る	川井 聡	31
連載 選択集を拝む(五)	須藤隆仙	32
御法語に聴く	袖山栄輝	40
コラム 仏教歳時記		45
連載 身障者から学ぶ	高木悦男	46
連載 無明抄	秦 恒平	52
Jフォーラム		59
事務局便り		69
編集後記		70



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下
表紙撮影＝川井 聡
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

ファインダー
の中の
仏教

たえず
変貌する
異国の神
仏教
(上)

写真と文

藤田庄市

(フォト・ジャーナリスト)

大好きな宗教の取材に関わり、写真を撮り記事を書く生業なりわいを続けていると、いろいろ気づくことが出てくる。仏教についても然り。その幾つかを記してみようと思うが、思いつきみたいなのなのでそう向きにならず読んでいただきたい。

話は次の四つ。舞台は現代である。

①総論的にいえば、仏教は異国の神ゆえに、現代においても生き延びるべくたえず時代適応と日本化を図っている。

②しかし、出自がインドでアジアをはじめ世界に仲間がいるので必然的にインターナショナルである。

③伝統仏教の大枠は檀家制の上に乗っているの、仏教が個人の宗教であるとあまり感じられないが、釈迦が個の悟りをめざしただけあって、やはり本質は個人の宗教である。

④仏教が日本化した姿のうち、最も頼りにされた働きは供養であり、現代でもその「供養力」は衰えを知らない。

以上あげた点の対極に想定しているのは神社神道である。それがどう対極であるかは、その都度説明することとする。

まず第一は総論的に仏教は異国の神であるゆえに、今もたえず延命のために時代適応と日本化を図っているということについて。

バブル経済期の仏教関係で目についた最大のデモンストレーションは大仏建立ブームで

あった。バブル崩壊後の一九九三年の文化庁調査によると、全国の大仏は奈良の大仏も含めて九二体あった。そのうち、一九八〇年以降の大仏建立はじつに五七体を占めている。巨大ということは耳目をひくわけで、これは必然的にビジネスに直結しやすい。というわけで福井県の勝山大仏やユーピア加賀の郷の慈母観音像などは、建立主体が企業家であり、のっけから仏教テーマパークのビジネスであった。後者のコンクリート製というののもなんと現代である。

では現代の大仏建立はすべてビジネスかというと、そう単純ではない。大仏ブームのさきがけとなった福岡県の成田山久留米分院の場合は、人を寄せるという意図はもちろんあるが、伝統仏教の祈禱活動の積み重ねの上に成立しており、ビジネス的側面は当然伴なうものの、企業ビジネスとはいえない。同じことは福岡県の篠栗新四国八十八ヶ所霊場の総本寺・南蔵院の巨大涅槃仏にもいえることだ。観光的要素を否定する気はさらさらないが、お遍路さんの熱い信心と結びついていることは間違いない。

異国の神、仏教が現代という時代に行った大デモンストレーションが大仏建立であるとともに、新タイプの仏像は今も進む仏教日本化の表われである。

その代表は水子地蔵だ。あの幼な子を抱き、かつ幼な子が裾にさがる地蔵の形は、賽ノ河原の絵の地蔵に重なるものの、全国中にゾロゾロ建てられたのがごく最近なのは承知の通り。成田山久留米分院の子どもを抱く大慈母観音像も水子供養が背景にある。儀軌にな



慈母観音と大塔 福岡県・久留米市（成田山久留米分院）

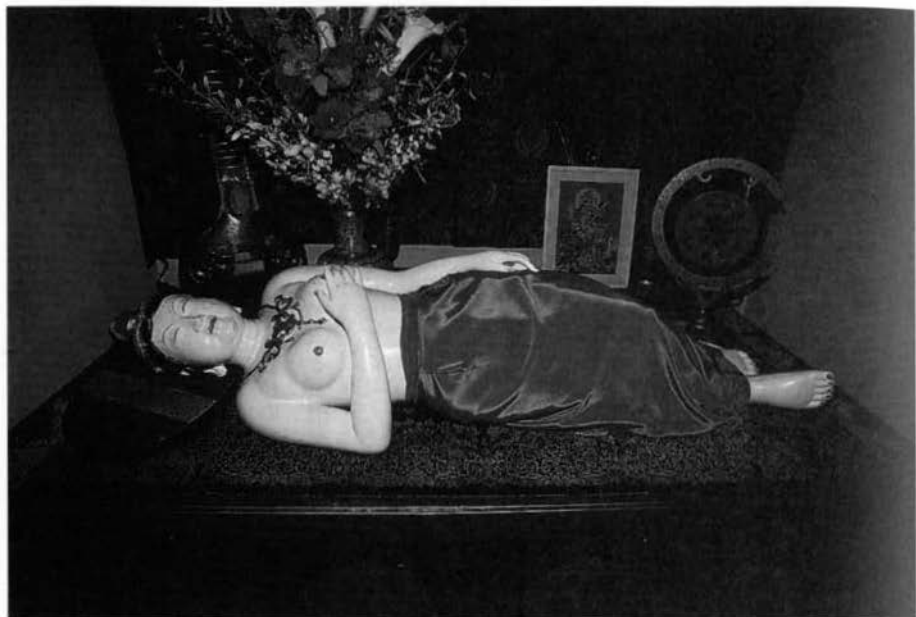
い仏や菩薩の姿をあみ出すのは庶民仏教の得意手である。水子地藏像や慈母観音像はその現代的展開といえよう。

水子地藏像のように全国的でなくとも、仏像の日本化は各所で新たな展開を示している。管見の及ぶところの最高傑作というか、個人的に好きなのが名古屋市桃蔵寺の「ねむり弁天」。写真のように美しい乳房も露わにお眠りになっている姿は、下半身の布をつい除けたくなる衝動を誘ってやまない。弁天さんといえばそれは昔から美人の誉れ高い神様であるが、本来は八本の手があり弓や刀などを持っており、立つか坐るかしていて寝ているというのは見たことがない。なまめかしい裸の白い肌は、江の島弁天もそうであるけど、彼女だって儀軌にある琵琶を抱えている。ところがこの「ねむり弁天」様は自らの象徴である楽器すらお持ちになっておらない。でも、なんの異和感も感じない。これぞ究極の日本的弁才天かもしれない。

奈良時代以前に発生した靈木化現仏に始まり、現代の水子地藏像、「ねむり弁天」に至るまで仏像も日本の変身を続けている。

伽藍もそうである。六世紀に仏教が公伝されて以来、直輸入的な規範をもつ伽藍建築から、浄土真宗の群参が可能な大広間を配置する大堂に変貌を遂げてくる。

近代になると時代にあわせて、東京・築地本願寺はインド風の外観を有し一種の先祖返りを果たしながら、内部はイス席というようにモダン化をはかった。現代でも時々変わっ



ねむり弁天 名古屋・桃巖寺（曹洞宗）

た寺がマスメディアに登場するように変容は続いている。ステンドグラスを入れた寺も出た。大阪市の浄土宗応典院は、なんと円形の劇場である。劇場風なのではない。音響、照明など劇場として造つてあるのだ。須弥壇はなく、六〇センチほどのレリーフ的本尊が掛けられているだけである。応典院の儀礼は舞台設備の音と光のなかなかでなされる。音楽法要と銘うった年末の「自分感謝祭」は、口語でフアイナルメッセージと称した「願文」が語られた。そのように儀礼自体もきわめて現代的に革新されたものである。集う人々も檀家制度ではなく会員制になっている。檀家制仏教が苦しみ悩みながら、現代的スタイルへ脱皮しようとしているのが応典院の姿だろう。

以上は伝統仏教とその周辺を主に考察の対象としてきたが、仏教系新宗教をみてみれば仏教の現代日本への適応ぶりははるかに明瞭であることはいうを待たない。

では民族宗教である神社神道はどうであろうか。

神社は変容を好まない。

このことはいえるのではないか。それは伊勢の神宮の遷宮をみればわかる。二〇年ごとに全く同じ構造の社殿を延々と更新しながら造り続けることなど、仏教では考えられないだろう。社殿があるのはまだしも、神社によつては現代になつても社殿を造ることを拒否する神々すらおられる。こうなると縄文時代か弥生時代の心性を保っているわけで、びつくりする。

もし、災害や火災で寺が失われたらどうするだろうか。好機？とばかり、さらに大きくしたり、まるで異なる様式にすることは大いにありうる。しかし神社はどうか。さきの応典院に隣接した丘の上には有名な生国魂神社が鎮座している。その社殿はコンクリート製だが、火災前とはほぼ同じ様式である。昨年、戦前の内務省神社局時代に撮影された旧官国幣社の写真を編集する機会があった。その光景は、神社に隣接した場所が激変しているのと対照的に、神域はほとんど変わっていないのである。このことは旧官国幣社ばかりか村の鎮守にもいえることだろう。だが仏教寺院の場合、風致地区の国宝クラスの寺はともかく、とりわけ都会の寺院や繁盛している祈禱・祈願寺は、改築や新しい堂社によって風景が相当に変わっているのではないだろうか。

祈願の参拝者を増やすよう努力する神社はたしかにある。しかし、氏子崇敬者の組織や制度から脱皮しようともがいている神社というのは聞いたこともない。

ここに異国の神である仏教と民族宗教の神社神道の違いがある。仏教は時代と土地にあわせ、たえず自己革新していないと生きてゆけないのである。

(つづく)

民間の
芸能と
宗教
①
伝統

新連載

伝
統
芸
能
研
究
・
千
町
の
会
代
表
作
家

川元祥一

「浄めの 意味をもった 芸能」

一、仏教と呪術

飛鳥時代の物部氏と蘇我氏の争いは「宗教戦争」だった。中国から朝鮮を通じて伝来した仏教を高く評価し、擁護した聖德太子とともに蘇我氏が、天皇を中心とした呪術的宗教を主張する物部氏を相手に闘った。

これは「民族宗教」と「普遍宗教」の闘い、あるいは宗教的革命として世界史的な現象だろう。キリスト教に見られる「魔女狩り」などがそうだ。こうした争いや変革を通して原始的と考えられた呪術的宗教から、普遍的教をもつ宗教へと進歩したと考えられている。その意味において私は聖德太子を中心とした日本のこの闘いに関心をもっている。聖德太子たちが天皇を中心とした呪術的宗教をどのように見ていたのか。

そうした関心をもちながら特別勉強もせず、に時間がたっているのであるが、歴史的な結果から見ると、一時は仏教が呪術的宗教を克

服したといわれながらも六四六年の大化改新以後は再び天皇制祭祀Ⅱ呪術的宗教が勢力をもち政治に利用されたとするのが定説だろう。「本地垂迹説」などがあつて仏教の面白い側面があらわれるのであるが、鎌倉時代までは仏教はおおよそ天皇制に利用され、呪術的宗教とまつわつたといえる。いうなれば、その間仏教は普遍性を失つていたといえる。そしてこのことが日本の仏教史に今も大きな課題として残っている気がしてならない。

鎌倉時代になつて新興仏教が出現して再び宗教的革命がはじまる。この時期に再び仏教の普遍性が強調され、新興仏教の力になつたといつてよい。とはいへ江戸時代になつて仏教はまたもや普遍性を失い、社会制度や習俗にまつわり、今でもその弊害が残っている。そのことを示す典型が部落差別ではないか。

以上のような仏教観をもっている私であるが、そのためにやはり鎌倉時代の仏教的革命や新興仏教の宗祖たちの言動に関心がある。

私が育った家が浄土真宗だったので親鸞の話を耳にすることが多かった。私としては、今でも根強い寺檀制度は早く変革し、信仰の自由をとりもどすべきと考えているのであるが、ともかくそのようにして知るようになった親鸞を通して、親鸞の師といわれる法然をも知るようになった。特別仏教の勉強をしているわけではない。だが法然と親鸞の特徴や共通性はそれなりにわかる。共通性は「ナムアミダブツ」だろう。

この「ナムアミダブツ」の意味がなかなかわからなかった。しかし最近になってその意味がわかったような気がする。字面の意味ではない。「弥陀の本願」とか「仏の慈悲」というものが何であるか、私自身の胸に迫ってくるものがある。そして、なぜ「ナムアミダブツ」と唱えるだけで救われると言いきれるのか。そのことが私なりにわかった気がする。

仏教を勉強していない私がいうことだ。主観的だと見られるかも知れないが「仏の慈

悲」がわかったと思った遠因は、聖徳太子たちが關った呪術的宗教を追跡してゆく過程だった。呪術的宗教とは何かを見てゆくうちに、それと対立した、あるいは対立せざるをえない普遍的宗教＝仏教が何であるか見えた気がするのだ。

二、民俗芸能の意味

呪術的宗教による行事は今でも日本中で実に多く行なわれている。これは仏教的行事よりはるかに多く、かつ根深いだろう。その意味でキリスト教文化圏とはちがう。「宗教戦争」の不徹底を意味するのであるが、今となれば、徹底すればよかったかどうか微妙だ。とはいえ、不徹底で良かったとするなら、これまでの仏教は根本的に問い直されなくてはならない。キリスト教文化圏でキリスト教文化が問い直されているように。

呪術的宗教行事も多彩であるが、ここでは民間の民俗芸能と呼ばれるものに限定する。

しかもそれをアニミズムとシャーマニズムに分類しながら、一部の例をあげてその世界を考えてみたい。説明する必要はないと思うが、アニミズムは人類全体の初期的宗教で、自然の現象すべてに「神」を見た。シャーマニズムはその「神」観念をもとに「神」との交流媒介者として生れ、やがて人間の個を神格化する。天皇がその例だ。

私が呪術的宗教に関心をもっているのはアニミズムであるが、日本ではシャーマニズムとアニミズムを混同する傾向があるので、この問題も考えざるをえない。日本では四、五世紀まで文字がなかった。したがってそれ以前のアニミズムは文学文献にない。文学文献を史料とするなら、それ以後、特に天皇や貴族の祭祀にシャーマニズムばかりが目立つからだ。

私が「仏の慈悲」とでもいえるものを感じてきつかけはアニミズムであり、そこから生れたさまざまな民俗芸能である。たとえば農

耕儀礼として行なわれる「田祭」など。ただ、これらは後で具体的に見てゆきたい。この回はまず仏教とシャーマニズムの関係をひとつの民俗芸能を通して考えたい。

三、仏教と舞楽——四天王寺——

仏教とシャーマニズムがあいまいに結合した例は多い。多くの寺で行なわれる「修正会」「修二会」などだ。そのひとつに大阪四天王寺

で毎年行なわれる「舞楽」(写真)がある。舞楽は雅楽のひとつとして中国から伝わり、朝廷音曲として保護された。中国でも朝廷を中心とした音曲であり、これは本来仏教と関係ない。ところがこの舞楽が聖徳太子の法要として四天王寺で行なわれてきた。舞楽は仏教とともに伝来したとする伝説がある。だから聖徳太子が建てた四天王寺で舞楽が法要として演じられるのは、一定の根拠があるかに見えるが、舞楽は朝廷において「浄め」の要素をもって演じられており呪術的機能をはたし

ていたのである。

ここに仏教と呪術の結合がある。このようなあいまいな結合が後の、いや今でも、日本における仏教と呪術、あるいは天皇制とのあいまいな結合を生むひとつの要因ではないだ



ろうか。そんなことを考えさせられる。

多くの寺で行なわれる「修正会」だけではない。江戸時代などになると各地の多くの寺に「庭掃」とか「清め」の役をはたす人が置かれた。この場合の「庭掃」や「清め」は「穢れ意識」を固定観念とし、これを排除する専門的役をはたす人々であり、それは身分的屬性に結びつき、部落差別の主要なる原因になっていたのである。

排除を前提とした「穢れ意識」が呪術（天皇制として）的観念なのか仏教的観念なのか論議されるところだ。今もはっきりしない側面があるものの、原始仏教といわれるものは「穢れ意識」をもたなかったと私は思う。その仏教がヒンズー教化されて日本に伝わったとする意見があり、どうもこれが正しいのではないかと思う。

また、すくなくとも鎌倉時代の新興仏教の各宗祖の教えは、何かの形で排除の対象としての「穢れ意識」を克服し、すべての人が穢

れをもち、なおすべての人が救われると説いたと思う。したがってそこには「穢」を「浄める」「専門役」を「排除する」必要はなかった。日本的な意味で呪術を克服するというのはこのような具体性をいうのではないだろうか。そしてそこに普遍的価値があり、仏教が普遍的宗教といわれる原因のひとつがあるのではないか。

ちなみに、四天王寺で行なわれる舞樂の中で「浄め」を行うのは二頭の獅子である。よく知られているもので、人が獅子頭を被って舞う獅子舞である。この獅子舞による「浄め」はその後多くの神社で行なわれ、その後民間で行なわれる正月の門付芸にもなった。その時、「清め」役として被差別者が行うことが多かったのである。

（つづく）

寺院紀行

山口・大日比 西圓寺



本尊の前には「専念佛場」の額がかかっている

撮影／**タカ才力邦彦**
文／**真山剛**

金子みすゞという女流童謡詩人をご存じだろうか。

明治三十六年、山口県仙崎町に生まれた本名金子テルことみすゞは二十歳の時に投稿した作品で西条八十に「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されながら、二十六歳で自らの命を断った女流童謡詩人だ。早逝したこともあり、没後五十余年経つてようやく遺稿集が発見された。

以来その作品の視点の優しさ、命に対する暖かな眼差しに多くの人々が心惹かれ、出版物となり今は学校の教科書にもその作品が載っている。金子みすゞの名前を聞いたことがない読者も、子どもさんに聞いてみるときっと知っているに違いない。

さて、ここで金子みすゞの代表作「大漁」を紹介する。

その前にこの金子みすゞを追い続け実弟を捜し、みすゞが童謡を書き込んだ三冊の手帳を見つけた詩人、矢崎節夫さんの「金子みすゞの宇宙」の序文（抜粋）を記しておこう。

作品はその人のコスモス（宇宙）です。／金子みすゞさんの童謡は、深く、広く、はてしなく広大なみすゞコスモスです。ここには、いのちのこと、生かされてあること、見えないけどあるということ、ちがうことのすばらしさなど、大切なことがたくさん光り輝いています。／みすゞコスモスの中心星は、『大漁』です。

その『大漁』を次ページ欄外に載せさせていたたく。



金子みすゞ。他界する数日前に撮った写真

金子みすゞの創作活動場は、店番として働いていた下関の本屋だった。しかし、詠まれた詩の多くは故郷仙崎の風景であり、漁師町の匂いだった。この『大漁』も故郷仙崎の浜が舞台だ。

かつて日本海西回り海運の拠点として、そして捕鯨を中心とする漁業で栄えた仙崎だが、この仙崎町の大日比に浄土宗の名刹、西圓寺がある。

西圓寺は仙崎のすぐ向いの青海島大日比湾を見渡す小高い丘にある。この青海島を含めた仙崎町には西圓寺以外の多くの寺院がある。もちろん宗派はさまざまだが、宗派を問わず共通した法要が仙崎の寺院では行われていた。それは鯨を供養する鯨法会だ。

仙崎は日本を代表する捕鯨地で、ちょうど仙崎と青海島間の湾に迷い込んだ鯨を瀬戸崎（仙崎の旧地名）や青海島（かほ）の家の前の網代（しつうろ）や紫津浦の網代に追い込み捕っていた。

鯨一頭捕れば七浦が賑わうといわれたぐらい鯨は貴重で、かつての毛利藩にとっても大切な財源のひとつだった。それだけ貴重な鯨だけに一頭の捕獲による争い事や、網の種類や使用場所についても浦同志での細かい取り決めもあった。仙崎の漁業はまさに鯨を中心に行っていたのである。

その仙崎に生まれ育ったみすゞにも「鯨法会」「鯨捕り」と題した童謡がある。また、とむらいとか墓といった言葉も少なくない。み

「大漁」

朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鰯（おおばいわし）の

大漁だ。

浜は祭りの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鰯（いわし）のとむらい

するだろう。

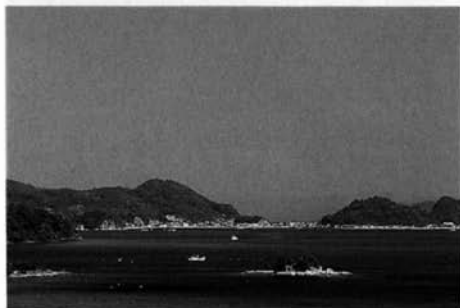
すゝの発掘者である矢崎さんは「大漁」を説明する中で輪廻転生やいのちという言葉を使っているが、まさにみすゝの人間性の中には仏教の教えと重なるところが少なくない。

もともと漁師町は篤く神仏を敬うが、ここ仙崎は中でも特別なところである。捕獲した鯨のお腹の子に戒名をつけ、埋葬した墓がある。まさに自然の恵に対する感謝の気持ちの具現化であり、同時にそこには目に見えない大きな世界への視点がある。金子みすゝはそうした仙崎の人々の言葉にならない気持ちと、万人がわかる言葉にかみくだいてくれたのである。

しかし、漁師町は全国にたくさんある。また捕鯨港も少なくはない。ではなぜ、ここ仙崎にこうした仏教的な心を持ったみすゝがあらわれたのか。それは江戸時代後半に念仏の布教で名を馳せた西圓寺の三人の上人による影響があるからではないだろうか。

法岸、法洲、法道をして大日比三師という。それぞれ西圓寺の第八代、第十代、第十一代の住職で、安永八年（一七七九）から文久三年（一八六三）まで仙崎を中心に布教活動を行っている。

西圓寺には法岸以降その宝灯を継いだ者を記した帳面が残っている。そこに名前が記された者はなんと四百四十二名。当時はすでに寺檀制度が全国に徹底され、仏教が硬直化し民衆に対する影響力も弱まっていただけに、三師を仏教の覚醒運動の祖という人もいる。



内海となる仙崎湾は穏やかだ

みすゞは早くに父を亡くしたこともあり、母や祖母の話を夜ごと聞いていたという。その祖母には法道との接点がある。大日比三師による仏教、とりわけ念仏の教えを肌で感じていたのである。その祖母に「見えないもの」をみすゞは教えられたのである。

さて、大日比三師の足跡をたどってみよう。

小高い山の中腹にそびえる西園寺の入り口には世界最初日曜学校発祥の地の碑が建っている。これは昭和四十二年、ロンドン大学のチャールズ・ダン教授が西園寺を訪れ認証したもので、日曜学校は法岸が始めた小供念仏会をもつて端となすという。

法岸は浄土宗の名僧、関通上人の弟子だが、捨世派と呼ばれるその教えに忠実に従い、請われるままにこの大日比の地にやって来た。理由は、僻地にあり貧乏寺だからこそ自分に良い、ということだった。来てみると、地元の子供たちの漁師言葉の悪さに驚いた。そこで、まず子供の教育と始めた念仏道場が日曜学校の原点となった。

「生まれてから死ぬまでできるのが念仏だ。年寄りでも子供でもできる」というのが法岸が関通上人から受け継いだ信条で、まさに法然上人の念仏の神髄に違いない。

法岸はさらに、もっと早くから子供がお腹にいる時から念仏を授け始めたという。これは現在も続いていて、毎年三〜四人のお参りが来る。そして子供の代わりに母親に念仏を称えさせ、帰りには

青函島東端の村、通を見下ろす高台にそびえる向岸寺



向岸寺の隠居所である清月庵にある観音





法岸の隠居所であつた法船庵。男子禁制の尼僧寺である



山門から見た西轟寺本堂

名号を腹帯びに入れるという。

また、現在も厳しい戒律を守り続ける尼僧寺も法岸が自分の隠居所を提供して今日に至っているという。当時は七つの尼僧の末寺があったというから、いかに法岸が民衆の心をとらえたかがわかる。

現在は四人の尼僧さんが十四カ条からなる戒律を守りながらこの尼僧寺、法船庵を守っている。ちなみに法船庵は西圓寺から歩いて二・三分のところで、こじんまりとした伽藍が西圓寺同様、山腹に佇んでいる。

三十六年間西圓寺の住職をして七十二歳で法岸は遷化したのが、その法岸の法話を聞き出家したのが法洲である。法洲は毛利武士の家の出て江戸で修行していたが、先代住職が遷化したとの法岸（すでに隠居の身だった）からの命で帰国、活発な布教活動を開始した。

法洲は浄土宗の教えを伝える道場、五重相伝を総本山知恩院の依頼で「信法要訳」としてまとめた碩学で、法岸の時代からの浄土真宗との法論に一人で応じたが、その学識と行動力に魅せられ真宗門徒の中から多くの改宗者が出たという。

当時は法論が禁じられていたうえに、寺檀関係の勝手な変更は許されず、幕府の宗教政策への否定ということと法洲は流刑となった。

流刑先の萩沖羽島では法然上人が讃岐へ流された時と同様、島人教化の良き縁をいただいたと伝道に励んだという。七か月で赦免、

法洲、法道が集めた
数万冊の書物と法蔵



西圓寺に戻り十三年を遠国から来る道俗に法を説き、遷化した。

法道は九歳の時に法岸に見い出され出家した。こちらも萩の武士の子で、その面相に並々ならぬものがあると法岸は法洲に話し、跡継ぎにふさわしい子を預かったと喜んでいたという。

その法道も学問好きで江戸の増上寺で学んでいる。法道は達筆で、現在西圓寺の宝物殿に残る屏風と対の屏風を見た中国の有名な書家に「日本にもこういう字を書く人がいるのですか」と絶賛されたという。三師の名号が現在も残っているが、法道の書はやはり抜きん出ている。

その法道は現在も残る仏教書など数万冊の蔵書を法洲とともに集め、また伽藍の建て直しを行っている。山門、本堂、法蔵、宝物殿、書院、無常院と当時の面影が残っている。面白いのは本堂で正面に入り口がなく左右に玄関がある。向かって左が男性用、右が女性用玄関で、法話中に正面から人が入っては気が散ると玄関を左右にわけたという。布教に対する情熱はこういったところにも見られる。

さて、大日比三師を生んだ西圓寺は元禄九年（一六九六）に隣村の商人にあった真言宗の寺を大日比に移し、浄土宗として再興した寺院だ。開山は鯨墓で名高い向岸寺の第五世讃譽上人。大日比三師が偉大過ぎたのか、開山以降の三上人までの話しは残されていない。現在は向岸寺の住職から昭和四十年にこの西圓寺の住職となった



夏蜜柑の原木は大日比にある

第二十二世綿野得定上人が法灯を護っている。大日比の住人はみんな檀家だが、戸数は百数十戸。隣の大泊、仙崎にも檀家がいるというが、決して多くない檀信徒ながら興隆を保っているのは、やはり大日比三上人による熱心な布教がこの地に根を降ろしているからだ。また大日比には上利家という名門が今も続いている。山口を治めた大内藩、そして萩の毛利藩に仕えた武家で、現在は時代のうねりの中で昔日の面影を失ったが、西圓寺建立にあたっては隣の商人から住民を移住させ、当時幕府から寺院建立の許可を得た豪族である。その上利家の文書が今も残され現在は長門市に寄贈され貴重な資料として県内外からの閲覧者が後を断たない。その中には鎮西法話集、円光大師（法然上人）行状和賛といった資料も残っている。

西圓寺のある青海島は海上アルプスと呼ばれ、山口の観光名所のひとつだ。二百メートルもの切り立った崖がある日本海側は、まさに絶景である。本州に面する南側の入り組んだ浦にいくつかの村があるが、昭和五十二年の架橋までは決して便利とはいえない島だったに違いない。そうした村だからこそやってきた法岸。その法岸は西圓寺を念仏道場とし念仏の波を広げたが、その波は姿、かたちを変え今も確実に息づいている。

絶景を楽しむとともに、一度訪れてみたい名刹である。

（ルポライター）

仙崎駅と併設のみずく館



窓から

写真と文

川井 聡

月

乗降客の途絶えた
駅には哀愁だけが残る
あるいは不意に
客車の窓の木枠から
懐かしい旅
の記憶がよみがえる
鉄路の果てに
彩いていくひとり
ひとりの人生

東北本線 郡山駅 福島県郡山市

黒磯発の普通列車は時間どおり郡山に到着。乗り換えに慌ただしく階段を昇っていく途中、ある視線に気が付きました。

その頃でも、珍しいほど真つ赤なホッペタをした女の子が、汽車の窓越しにこちらを見ていたのです。僕がかついでいた三脚やカメラなどの機材類は充分に「不思議」の対象だったようです。彼女の視線とホッペタに魅せられ、急いで数枚シャッターを切りました。

話を聞くと、お母さんが仕事にいつてる昼間、お婆さんがあいだあずかっているんだそうで、ホッペタが赤いのは「畑仕事の合間も目の届くところにいるから、風にあたって赤いんじやろう」と話してくれました。

彼女も今頃は、高校か大学生くらいでしょう。いったいどんな女性になっているか、もう一度会ってみたい気がします。

かわい さとし 現在、国内の鉄道旅行ガイド制作のため、日本全国のローカル線と温泉をめぐるながら取材中。自宅より取材先にいる方が長いらしい。

選拔集を
拝む
(五)

連載

須藤隆仙

法然上人鑽仰会理事
函館・称名寺住職

●各宗に一切経

近代において浄土宗の高僧方が全仏教のご活躍をなされたことを前述しましたが、続きがあります。日本の仏教の典籍のほとんどは漢文であります。『大正新脩大蔵経』のような完備された一大叢書が刊行されましたが、何せ漢文ですから一般の人には読めません。一般の人というよりは、大部分の日本人は読めないのです（飛び抜けた大学者なら別ですが）。それで、せつかくこのような貴重な典籍があっても読めないのでは何にもならない、それこそ宝の持ち腐れであると思つて、これを国語訳にしようと思える方が現れ、『国訳大蔵経』『国訳一切経』『昭和^{しやうわ}新纂^{しんさん}国訳大蔵経』といったような国語訳経典が出版されました。これにも浄土宗の坊さんが大活躍されたのであります。とくに『国訳一切経』は岩野真雄^{しんゆう}師が心血を注がれたもので、『大正新脩大蔵経』の主要なものをすべて国語訳にしており、

仏教研究のため大貢献することになったのであります。仏教の学者さんでこれの世話にならない方はなく、大学生でもこれによって仏教を学ぶことが可能になったのでした。

このようにして、法然上人の念仏の教えは、仏教を蘇生させたのであります。聖道を捨てて浄土に帰すという、何か仏教が半分にさせられて、小さくなったように考えられがちですが、そうではないのです。浄土三部経を頂点とする一切経ということで、仏教が新しく編成されたのであります。

この原稿を書いていて、じつは非常に驚いたことがあるのです。一昨年から宗教雑誌『大法輪』に「法然の生涯」というすばらしい論述が連載されていたのですが、それが単行されて新聞に広告が出たのです。そしてそのキヤッチフレーズに「法然を知れば日本仏教の全体が見える」とあったのでした。私は思わずアツと息を吞みました。まさに私が書いていること、言わんとしていることが、キャッ

チフレーズとなって眼前に出てきたのです。さっそく書店に注文して取ってみますと、その帯にもその文句があったのです。この論を書かれたのは随筆家の松本章男氏（あきお）であります。じつに透徹した頭脳と、豊かな学殖とによって、前人未到の「法然上人の世界」を繰り広げてみせたこの大論文は、法然上人こそ全仏教の人であるということを、明確に論証してみせたのであります。

法然上人、即ち念仏の元祖様であります。元祖様によって、新しい仏教というものが出てきた、そしてその奥義書こそが『選択集』であります。ですから『選択集』というお書物は、聖道を捨てる、雑行を捨てる、などというて仏教を狭くしたように誤解されがちですが、真意を味読すれば決してそうではない、浄土三部経を基本にするというものの、仏教の全体を問題として、そこに新しい組み立てを断行したという決死の書であります。浄土真宗で真摯（しんしん）に元祖様のことを研究なされた



高千穂徹乗先生は、その著『選択集入門』のなかでこの事実を、「選択集は形式上からみれば浄土三経と善導の疏の要文等を選び、これに私積を加えた十六章の短篇である。しかし思想的には画期的な重要聖典であり、宗教的には經典の源底と仏教の奥義とを究めた施策と体験の書である」と述べておられるのであります。

即ち元祖様は「各宗に一切経あり」とのお立場から、末代の凡夫に適合する仏教を構築された、その奥義書が『選択集』であります。から、元祖様のみ教えの流れに浴す人たちには、知らず知らずのうちに「各宗に一切経あり」といった視座がそなわっているわけであります。浄土宗でいえば二祖聖光上人・三祖良忠上人（りょうしゅう）、さらには中興の祖といわれた聖岡上人（七祖）などは、大変な仏教学者であられます。今日そのご著述を拝読いたしますと、それはあたかも仏教辞典を読むようなものでございます。仏教辞典が元祖様を語り、仏教

辞典が『選択集』を解説しているようなものです。望月先生が『仏教大辞典』をお作りになられたのは、そういった伝統の上に然らしめたものではないでしょうか。また親鸞聖人の『教行信証』なども、まさに「各宗に一切経あり」との視座でお書きになられたものではないでしょうか。近代でいえば、真宗の碩学金子大栄先生の『仏教概論』の高著などもそれでありましょう。

●裸の自分を知る

さてこの画期的な仏教革命の書『選択集』は、この現代の混沌混沌の時代に、私たちにいったい何を教えているのかといえますと、およそ、三つのことがあると思うのであります。①は「裸の自分を知ること」、②は「正念場は現世であるということ」、③は「念・信心は既得の世界であるということ」、以上の三点であります。

①の裸の自分を知ることとは、第三回

の稿で「法然上人の宗教は、人間凝視の宗教」であると述べておきましたが、それでありまして。生まれてきたままの自分、今現に存在している自分の、本当の姿を知ることです。あります。学問の世界では実存的思想などといっていますが、じつはこれが元祖様浄土宗開宗の立脚点なのであります。まず順序立てて申しますと、二祖聖光上人は、元祖様は『観無量寿経』に説く深心の文に依って浄土宗を開かれたといっておられるのであります（『浄土宗要集』）。深心とは同経に念仏行者の心構え三つ（三心という）を説くなかの一つです。善導大師は同経の註釈書でこれを、「決定して深く信ず、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来つねに没しつねに流転して出離の縁あることなし」と「決定して深く信ず、彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受し疑いなく慮りなく彼の願力に乗じて定めて往生を得」と二様にご説明にられたのであります。これを二種深心などといいますが、今問題は

前の「自身はこれ……」のご文であります。

「自分は罪悪者でこの生死の苦界を脱し得ない凡夫、脱苦とは無縁の人間である」との自覚であります。その罪悪凡夫を阿弥陀仏は極楽へと救って下さる、これが元祖様開宗の基点であります。

今日、人間にとって、この自覚ほど大切なものはないのではないでしょうか。それは第一回の稿でもちよつと述べておきましたが、現代はもう人間が偉くなり過ぎてしまつて、自然環境は破壊するは、背徳行為に奔走するは、殺戮行為に狂奔するはで、まさに世紀末的現象の花盛りであります。しかも考えてみると、自分もそこにいますのであります。そこで、そのことをまず知らなければならぬ。自分の姿、裸の自分に、まず気付かなければならないのであります。教科書裁判で知られた家永三郎博士は日本仏教思想史の大家でありますが、念仏信仰における人間の本質観、それはじつに核心をえぐったものであり、そ



これから社会的連関も行動も出てきているのだから、その人間自覚こそ、日本仏教の今後の生命であると学説しておられるのであります（博士著『中世仏教思想史研究』傍点筆者）。

善導大師は遠い遠い昔（約千三百年前）にすでにそのことを教えておられるのであります、これを受け継がれた元祖様は、『選択集・第八章』に「念仏行者は必ず三心を具足すべき文」を設けられて更にこのことを教えられ、しかも前述の如く三心のなかの深心をもつて浄土開宗の基点とされたのであります。三心は深心の他に、至誠心（真心）と回向発願心（共々に極楽を願う心）とですが、元祖様は念仏行者は必ず三心を具足せよと説かれた第八章の末尾で、「この三心は総じてこれを言え、諸の行法に通ず」といつておられるのであります。即ちこの三心は、念仏行者の心構えであるのみならず、仏教のすべての行にこの三心は必要だというのであります。そして『聖覚法師に示されける御詞』では、

「末法には、聖道の行人自然に虚偽を懐き、念仏の行者多く至誠なり」とも仰せられているのであります。私たちは、真心をもつて信心を行じ、みな共々に人間関係を楽しいものにしていかなければならない。その中心になるのは、罪惡の凡夫であるという宗教的謙虚さであります。元祖様は念仏の行者にこそその謙虚さがあるといわれた。それは念仏によって裸の自分を知ることができるからであります。「人目をかざらずして往生の業（念仏）を相続すれば、三心は具足するなり……妄念の華は茂けれども、三心の月はやどるなり」（『諸人權化の御詞』）と仰せられる所以であります。

● 正念場は現世

次に正念場は現世であるという自覚とは、念仏こそ現世を生きるためのものであるとの認識であります。よく間違つて、浄土教は来世だけを大切にして、現世を粗末にしてい

るなどという人がおりますが、とんでもない誤解であります。

元祖様は『選択集・第九章』で四修ししゅうという念仏行者の実践態度をお示しになられました。四修とは、長時修ちようじしゅう（いつまでも行う）、恭敬修くうけいしゅう（愍重修とも。敬いの心を忘れない）、無間修むけんしゅう（絶え間なく続ける）、無余修むよしゅう（余事を交えない）などの四つであります。四つのうちで長時修が基本になると教えられ、他の三修はいつまでも行わなければ意味が失われると論じられたのでした。そしてそのいつまでもというのは、善導大師様が、「畢命ひめいを期として誓つて中止せざる」（『往生礼讃』）と定義されたのに注目しなさいと教えられたのであります。

これが大切なところであります。畢明を期すとするとは、命いのち畢おむる時までを期限としてお念仏を称えなさい、ということなのであります。命畢いのちおむる時までですから、即ちこの現世での一生であります。あくまでも現世での実践がお念仏であり、現在の生きざまを教え

たのが、お念仏の教えなのであります。ですから元祖様ははっきりと、「現世のすぐべき様は、念仏の申されんかたによりてすぐべし」とか「いけば念仏の功つもり」などと仰せられて、あくまでも現世・現在が問題なのだと教えられておられるのです。

元祖様は決して、観念的なユートピア的世界を教えられたのではないのであります。現実の克服を教えられたのであります。現実の苦に満ちた世界であります。そこから救われたい、それを克服したい、と誰しもが思うでしょうが、その方法はなかなか現実のなかには見出し難いのであります。ですからそれを乱すこそが、人生最大の課題といつてよいであります。

元祖様はそのことに苦しみぬかれたのでした。しかしその結果発見したことは、あまりにも無力である自分でありました。「ここにわがまきは、すでに戒・定・慧の三学のうつはものに非ず」という悲しい現実でありまし



た。仏教が教える三つの抜苦の方法、戒（いましめの実行）、定（静慮による解決）、慧（悟りへの転換）、そのどれ一つできない自分を見出し、絶望するよりほかなかったのであります。

そこに浄土往生ということが出てきたのであります。極楽浄土に往生することによって、この人生の最大課題を解明することができる。その浄土往生のためには、阿弥陀仏が用意して下さっておられる本願（救おうとの願い）の念仏にすがる以外に道はない。その大発見があったのであります。それがあの元祖様四十三歳における「なげきなき経蔵」に入り、かなしみかなしみ聖教に向かい、手ずから自ら聞き見しに、善導和尚の観經の疏（し）にいわく。一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざる之を正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に。という文を仰ぎ、もはらこのことわりをたのみ（略）心にとどめたる也」（『聖光房

に示される御詞」との告白であります。ここにその浄土とは、つねに私たちに働きかけながら、現実を解決してくれる力となる、現実とは来世という極楽浄土をもつことによつて、現実の世界となる、そういうことが可能となったのであります。

念仏することは、阿弥陀仏と一緒に生活することであります。鈴木大拙博士は、阿弥陀仏の慈悲・本願というものを、「救済しようとする宇宙的な意志」と説明されたそうでありますが、まさにその救済しようとする宇宙的な意志と一つになることであります。

そこで念仏者には、現実の、現世での、広大な利益というものが現れてくるのでありまして、元祖様は『選択集・第十五章』を「六方の諸仏念仏の行者を護念したもうの文」として、これを述べておられるのであります。それは善導大師のお説を引用されて、念仏行者はたたくさんのみ仏に念じ護られるから、悪鬼神が寄り付かず、悪病・厄難からのがれ、



罪障が消え、阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩が離れずに守護して下さるとの尊い事実であります。さらに『般若三昧経』などを引いて諸天・諸神も守護して下さること、寿命を延ばさせて頂けること、なども教えておられるのであります。また別に、『浄土宗略抄』には、

「仏の御力は、念仏を信するものをば、転重軽受」といいて、宿業限りありて重く受くべき病を、軽く受けさせ給う」とお説きになっておられるのであります。これは非常に大切なお教説でありまして、念仏者の現世利益の大切なところは、ここにあると思うのであります。諸仏・諸神・諸天が護念し給う故に、転重軽受の益があるのであります。そういった体験のおもちの方は多いと思うのであります。

(法然上人讃仰会理事／函館・称名寺住職)

御法語に聴く

真言の教えに云う阿弥陀は是れ己心こしんの如来なり、外を尋ねべからず。この教の阿弥陀は法蔵比丘の成仏なり。西方に居す。其の意、大いに異なり。彼れは成仏の教えなり、此れは往生の教えなり。更に以て同じうすべからず。

【『一期物語』】

真言宗の教えでは、阿弥陀さまは私たちの中の心にいらっしゃる仏さままで、私たちの心を離れていらっしゃるわけではないのです。しかしながら、この浄土宗の教えでは、阿弥陀様とは法蔵菩薩が修行して仏となられたお方で、現に西方極樂浄土にいらっしゃるのです。その理解の仕方は大いに異なるのです。真言宗はこの身このままで仏となる教えであり、浄土宗は極樂浄土に往生してそこで仏となる教えです。ですから、くれぐれも両者を混同してはなりません。

ほうしん
報身くこの私をお救い下さる仏さまく

先日、京都へ向かう新幹線の車中、東京駅で購入した『エイズ犯罪
血友病患者の悲劇』（櫻井よし子氏著、中公文庫）を読んで、次の一節に
いたりしました。（ここは薬害エイズ問題そのものについて語る場ではないので、詳細は櫻井
さんの著書をご覧ください。）

一人さん（仮名）の持ち時間は残り少なくなっていた。最後の入
院だ。消毒薬とビニールシートの床と、完全武装の病院に、彼は死
ぬために戻っていた。

「熱くて触れられないような蒸しタオルで、痛くないように優しく
全身を拭いてやりました。『母さん、気持ちよかった。生きかえる
みたいや』って」と真理子さん（仮名）。

亡くなる二週間ほど前から、一人さんはテレビを少しずつ近づけて
見るようになった。目がだんだん、見えなくなってきたのだ。

「それに死の臭い。消毒液を撒いても消えない。体全体からその臭
いが出ます。口の中も内蔵もカビでいっぱい」

「一人が寂しがって、私の行くのを毎日、待ってるんです。ちょっ

とても遅れると、『母さん、今日は一分遅かったね』って。家でお父さんの炊事もあるし、そんなこと言わんといてねと言うと、『だけれど僕はその一分、待っちゃるけんね』って」(中略)

真理子さんは一人さんの死の一週間前に、夢で息子の死期を悟っていた。「シンドかったら南無阿弥陀仏と三回唱えてお願いしなさい」と言いしかせたその日の真夜中、彼は亡くなった。まさに真理子さんが予測した日のことだった。

恥ずかしながら私は、この一節を読んだ時、涙をこらえることができませんでした。

冒頭の法然上人のご法語は、真言宗の阿弥陀さまと浄土宗の阿弥陀さまをお比べになられての尊いお示しです。もちろん、真言宗の阿弥陀さまばかりか、浄土宗以外のすべてのお宗旨のみ仏のあり方を指しているといっても過言ではないでしょう。天台宗しかり、臨済宗しかり、曹洞宗や日蓮宗しかりです。つまり、浄土宗以外のお宗旨にとって究極のみ仏は、姿形などなく全世界に遍満している真理そのものなのです。こう

したみ仏を法身ほっしんといいます。だからこそ私たちの心そのものでもあり、心の外に仏を求めることをやめよと教えているのです。なるほど、お釈迦さまがお悟りになられた道程を自らも体現しようと精進を重ねるお宗旨（成仏の教え）のお坊さま方にとって、それは素晴らしい教えとなり得ることもあるでしょう。そして、科学的合理主義とやらをこの上もなく素晴らしいと受け止めている頭でつかちの輩には受け止めやすい面もあるのかも知れません。

けれども、自分の心そのものでもある法身としての仏ははたして機能しているのでしょうか。かりに今そうだとしても、久しく機能し続けるのでしょうか。もつと言うならば、わずか一分でも早くお母さまの来院を心待ちにする一人さんのような状況に自らがおかれたとしてもそれが機能する、とどれだけの方が胸をはって言い切れることでしょうか。

法然上人は、心の中にいらつしやるはずの仏がなかなか機能しないという私たちのありのままの姿をしつかりとお見つめになりました。そして、こんな私たちを救おうと永い間ご修行下された阿弥陀さまに心の

底から帰依され、その仰せの通りにお念仏を唱えお浄土に往生させていたたく浄土宗の教え（往生の教え）を確立して下さったのです。こうしたみ仏を報身といいます。ご修行いただいた阿弥陀さまだからこそ、私たちの往生が叶うお浄土があり、そのみ名を唱えるお念仏がこの上のない尊い行いとなるのです。真理そのもの、私たちの心そのものである法身としての阿弥陀さまのみ名を唱えても、それはマントラ（真言）ではあってもお浄土へ往生させていただけの尊い行いとはならないのです。

はからずも私が新幹線で涙をこらえきれなかったのは、一人さんの無念さを感じたからであると共に、一人さんの心の支えであつたお母さまの言葉通り必ずや唱えたであろう「南無阿弥陀仏」というお念仏の声に応じて阿弥陀さまが来迎され、お浄土へとお導き下されたことを確信したからです。そして、あらためてこの私をお救い下さる報身としての阿弥陀さまをお示し下さった法然上人のみ教えの尊さ、ありがたさを心の底から感じられたからでありました。

合 掌

立冬。自然はまだ秋色濃いのですが、歳時記では、十一月の一週あたりから冬となります。

石の家ぼろんこつんと冬が来て
高屋窓秋

見事に冬の到来を感じさせる句です。「ぼろんこつん」という疑音が効いています。早くなつた日暮れ。朝夕の手足の冷えなど「石の家」というぶっきらぼうな言い方によくあらわれています。

つけもの石重きほどよし山眠る
成瀬桜桃子

春の季語に「山笑ふ」があり冬の季語に「山眠る」があります。風もない雪もないおだやかな日和の山。ですが怖い感じもあります。

空也忌の虚空を落葉ただよひぬ
石田波郷

陰暦十一月十三日は空也忌。踊念仏の開祖で阿弥陀聖と呼

立冬

ばれた御方です。「今日今日、寺を出る日を以て忌日とせよ」と弟子にいいのこして東国に向かった、その日を忌としたといわれています。この句を作った波郷の忌日は十一月二十一日。

一門の酔の手向けや波郷の忌
川畑火川

他に「遺愛の徳利」の句など見えて、酒の回向の似合う人。我が尊敬する俳人です。

南無阿弥陀仏。

一筋の道を求めて

― 祖師との出会い、父と子の人間像 ―

藤井實應著 ■ 藤井正雄編

A5判・並製

本文250頁

定価2,300円〈税込〉

●
株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0479

連載第五回

みんなの役に
立つこと



高木悦男

乙武君は五年生になって組替えが行われ、若いO教諭が担任となった。

私は区の囑託に採用され、巡回教育相談員となった。巡回教育相談員とは乙武君のような障害児を抱えている担任からの要請があれば、出かけていって担任のサポートや相談に応じるのが仕事である。

初仕事は、乙武君をどのような形で移動教室に参加させるかであった。そのためにO教諭、S教諭と私と三人で移動教室の行われる川場村に下見に出かけた。

世田谷区では五年生を対象に、川場村（群馬県）にある区の施設を使って二泊三日の日程で共同生活を実施している。自立心を育てるとともに、人を思いやり助け合う心、苦しさに耐える意志を養うのがねらいである。飯盒炊飯、山登り、農作業等都会で育った子供たちにとっては過酷な体験学習である。

O教諭は大きなリュックザックを背負ってきた。中には大きな丸太が一本入っている。「この丸太は、乙武君の体重ぐらいあります」

彼は登山道が急斜面が多く、バギーを押して登るのは無理だと判断し、乙武君を背負う覚悟をしていたのである。

「子供は、親の背を見て育つ」と言われているが、O教師のように責任感が強く、何事にも前向きに考え、やる気のある教師を子供は慕うものである。このような教師のクラスには、いじめもなく、学級崩壊など考えられない。

今回の移動教室では、乙武君の他にも障害児はいるし、虚弱体質の子供もいたために、乙武君だけを背負って登ることは良くないと学年で判断したため、これら数人の子供は登山口から引き返し、巡回教育相談員が預かって村めぐりをした。

その夜私は、乙武君と風呂に入った。改めて乙武君の傷跡の痛々しさを強く感じた。この傷跡のことについて少しふれよう。

四肢欠損とひと口に言ってきたが、足と手の欠損の様子は多少違っている。足のはうはちょうど膝の関節から下が欠損しているが、

腕のほうは上腕骨の途中から先が欠損しているのである。このように、途中で欠けている骨は伸びてくるようだ。ほおっておくと肉を突き破って伸びてくるのである。そこで幼児期に金具を入れて伸びないための手術をした。手術した医師は、日本には症例がないために、外国に行つて勉強したと聞いている。

しかし、三年生のころから再び骨が伸び始め、骨を押さえていた金具が肉を破つてポロツと落ちた。そこで再度伸びないための手術をした。この二回の手術跡が痛々しいのである。この二回の手術も乙武君の精神力の強さの一因となっているように思われる。

○教諭が乙武君を担当して考えたことは、彼が体育のときの着替えや、給食時の配膳、校外に出るときにはバギーを押してもらうなど、一方的に友達から世話になつてゐることで、これに甘んじるような人間になつてほしくないということだつた。

○教諭は乙武君が、俺はこれをやつてクラ

スのみんなの役に立っているといえる、何かをやらせたいと考え、ワープロを打たせることを思いついたのである。

○教諭は乙武君と話をするときにはいつも床に座つて話をしたそうである。これは、子供の目の高さで話をする、という教育の基本であるが、この時も床に座つて、ワープロのことを乙武君に切り出した。

「補装具研究所で以前、ワープロを打つたことがあるよ」

と乙武君は答え、大いに乗り気だつたそうである。

初めは○教諭の私物のワープロを使つて始められたが、後にしばらくして区教育委員会から新しいものが貸し与えられた。

彼は見事に使いこなし、学級新聞作りはもちろんのこと、担任の先生やクラスの友達が書いたものを、通知や資料をどんどん活字化していった。○教諭はかえつて、自慢げに使いこなす彼の姿が、クラスのみんなからうらやましがられるのではないかと、心配するほ

どとなった。

私はこのことは乙武君にとって、とってもすばらしい教育だったと考えている。人間は集団の中の一員として、何かみんなの役に立つことを実践できることによって得る喜びが、最高の人間教育であると思う。そうした意味でO教諭が彼に抱いた願い、社会の一員として、義務を大切にする大人に育って欲しいというものは、彼の将来にとって大きな意味を持つことだったと私は受け止めている。

五年生になっての運動会で、初めて徒競争に出場した。一年〜四年までは、個人競争であり、

「無理に走らせることはない」

という学校側の意向が強かったが、

「本人の意思を尊重したい」

というO教諭の強い願いから、走らせることに踏みきったと聞いている。

運動会当日乙武君に対しては、百メートル走でスタート地点を五十メートル前にして、

スタートをさせたが、二十メートル〜三十メートル走ったところでみんなに追い越され、広いトラックを最後は一人になってしまった。「がんばって」

大きな声援がどこからともなく起こり、ゴールに入ったときには、怒涛のような拍手が会場全体から起きた。走り終って乙武君は

「来年も走る」

と言っていたそうである。

六年生になると他校との競技大会に出ることになった。連合運動会や水泳記録会である。

連合運動会は約三十校（世田谷区内全小学校の半数）の子供達が集まる大会だ。行きかう子供たちの中には、乙武君を指さしたり、

じつと見つめたりする子もいた。乙武君は平気な顔をしていたが、クラスの中の気性の激しい者の中には、くっつかかる子供もいた。

水泳記録会は近くの三校が合同で行った。

一人最低一種目には出場しなくてはならない決まりがあり、乙武君も二十五メートル競泳

に出ることになった。乙武君は浮くことはできるが、少しでも波が立つと沈んでしまう。人間は両手両足があつてこそバランスが取れて浮くことができるのである。乙武君のような身体だと、極端に言えば丸太と同じで、波が来るとくるつと回つてしまう。そこでO教諭は、大きなマットを乙武君の身体に合うように切つて特製のビート板を作り、泳がせることにした。また安全を考えて、友人のI君を後ろからついて歩かせた。

乙武君はそのビート板を使い必至に二十五メートルを泳いだ。最後乙武君一人になつてしまったプールを見つめ、会場全体が異様に静かになり、みんなの視点は一心に乙武君に注がれた。乙武君がゴールしたときには、またしても大きな拍手が起こり、他校の女の子の中には目頭を押さえる子も大勢いた。

反省会るとき、他校の校長、教師から、「私どもも子供達もいい勉強をさせてもらいました」

という御礼の挨拶があつたと聞いている。

乙武君の目立ちたがりやの性格は四年生のときから、児童会の代表委員に立候補して、四年では書記に、五年では副委員長に、六年では理科委員長として活躍した。

乙武君は小学校六年間の生活を思いっきり楽しく過ごしたことを思う。平成二年三月二十五日、先生方、在校生に送られ、卒業証書を手に新しい門出の第一歩を踏みだした。

「案ずるより生むが易し」という諺があるが、H学務課長が職をかけて乙武君を普通学級に入れたことは正しかった。それは乙武君自身にとつてもさることながら、乙武君がY小学校に在学したことによつて、どれだけ多くの子供たちが、そして大人たちも含め影響を受け、正しい成長に役だったか計り知れないからである。

(つづく)

(元公立小学校教諭)

岡昌人著「先天性四肢欠損児」——A君と

その級友たちが教えてくれたもの」参照

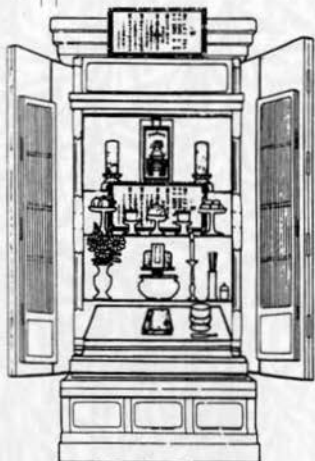
好評
発売中!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大 (32.0×18.3cm) 735円／小 (27.3×14.2cm) 420円

注文・問合せは
法然上人讃仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

無明抄

人間なんだ もの

秦恒平

7

前回、「安心への道」と送った原稿が、「不安への道」と題が変わって発行された。校正を見ていた私も、見落としていた。「まさか」ということは「ある」ものだ。日頃の口癖を、また自身で確認したようなものだ。

「まさか」ということは「ある」ものだ、宜しいことにも有り、ありがたくないことにも有る。「まさか」を否定し否認しては、人間の歴史はじつに貧弱にしか育ってこなかったろう。この百年に、飛行機が空を飛び、インターネットが世界中を網の目で覆った。「まさか」は、実にいろいろに実現している。「神」までが、死んだとさえ言われた。

三十年まえに、東西を峻別したベルリンの壁が崩れるとは、ソ連がロシアに変わるだろうとは、私たち一般市民のだれが予測できたろう。太陽系の果てへまで人工衛星が飛んでいって精緻に働いてくるなどと、想像もつかないことだった。

いやな「まさか」は勘弁願いたい、信じられないような発明発見、また幸運に見舞われる喜びも、真つ逆様の不幸も、われわれは、これで日常的にさまざま体験してきている。「この世はまさかの連続ですよ」と、たいして誇張とも思われない顔で述懐する人が、見回してみると身の側にも一人や二人はいたりする。

大学の教室で、「ともあれ」人間を二つのタイプに分けてみよと学生に出題したとき、およそ一つとして重なった答えは無く、みな、いろいろな考えてくれて面白かった。その中にも、「まさか」を、信じる人と信じない人、という「認識」がちやんと含まれていた。「まさか」とは、言い直せば「不思議」に通じている。東工大のような優秀な理系大学の

学生に、「不思議 受け入れるか」と聞くと、大半というよりも大多数が、「当然。だから自然科学の研究が成り立つ」と答えてくる。人間のすでに知っていることよりも、はるかに多くまだ知らないことの現に有るのを、理系の学生は体感している。

では「不自然、受け入れるか」と押して聞くと、これは答えが分かれる。

大自然が演じてみせる一見不自然な「もの・こと」も、人知のなおよばざるゆえの「不自然視」に過ぎないことがたくさん有る。地球が丸くて動くなどと、大昔に説いた人はいなかった。不自然の極みとして失笑された。火炙りにまで遭いかねなかった。そういう歴史的な無知を一つ一つ克服して来たのだから、大きな自然の一見不自然なところも、「なぜ」と問い掛けて行く姿勢が身についた。そういう「不自然は、謙虚に受け入れねばならない。」だが個々の「人間Ⅱにんげん」が絡んで生み出す、どうしようもない「人間Ⅱじんかん」の不自然は受け入れにくい、と、およそ、そういうことらしい。

「神秘」はある。しかし人間のすること為す事には、不思議よりもむしろ混乱や混雑が多い。たんなる錯誤が多い。手前勝手も多い。人間とは「まちがう」存在であり、「迷い惑う」から人間なのだ。「人間なんだもの」という物言いで、どれだけ多くのまちがいや失敗の言い訳がされているか。「どんまい、どんまい」と、互いの傷をなめあうように、互いの失敗をかばいあい慰めあって生きて行くのが「人間的な」優しさかのように、現に大勢が感じているじゃないですか、というわけである。なるほど。

「人間なんだもの」と、たしかに都合のいい言いわけをしてきた。そういう「人間」観で

よろしいのか。そう反問したい気が私にはあった。今も有る。その一方、それであればこそ人は、自身よりもずつと彼方に、超越的に堅固なものの存在を思いまた願わずにいられなかったかと感じたり、遥かに遠いとした憧れていたそれが、わが心身の核心にすてに秘藏されて在ると観じたり、して来たのだと「不思議」な気がするのである。「まさか」と思っていたことが現認され現識されることが「ある」のである。

はかなしとまさしく見つる夢の世をおどろかて寝る我は人かは 和泉式部

「おどろかて」は、この場合、目も覚まさないでの意味だが、ここにいう「人」には、積極的な意義を授けられている。和泉式部には、他にも、認識のつよい和歌があり胸をつかれることが、まゝ、ある。

くらきよりくらき道にぞ入りぬべしはるかに照らせ山の端の月

この一首など、「まさか」を知りぬいた「善知識」の深い祈りであり、まさに「黙語」である。

話題をすこしズラシてしまいが、ときどき、識語を添えて著書に署名を求められると、自身を励ます気持ちからも、「黙而識之」と書いている。そういう境地を是と願うからであ

るが、これを、都合のわるい場合の「言いわけ」にしてはならないとも考えている。「黙」には、あらゆる雄弁を超えた純真の大黙もあり、しかし、愚痴の閉口もある。答えないので、応じかねるのとは、別であり、応じたくないだけの沈黙は、即ち退屈である。呐喊の域を突貫しない「黙」は浅く、ただ暗く、まして仏の物真似でしかない「黙」風情では、衆生に何を示すのか。拈華微笑は偉大な「応」であり、只の「黙」ではない。大雄弁を超えて出て在る、大雄峰の「黙」である。問わず答えずの「大応」が成るまでには、生々流転の努力と誠実とが無くては済むまい、それを棚上げに、仏家にただ真似ごとで黙りこまれている、衆生は先途を喪い迷惑する。「まさか」そんなお坊様ばかりではあるまいけれど。

先に死ぬしあはせなどを語りあひ遊びに似つる去年こぞまでの日々 清水房雄
眺めよき場所に席とり待つと言ひき遊びのごとく死をば語りき 大塚陽子
かくも早く死する命と思はねばあそびに来よと言ひて別れつ 八上彦一

現代短歌の三首がこめた痛嘆の声は、だれの胸にもまっすぐ届くだろう。「まさか」と思ふいちばんの難所がここに露頭している。自分だけが悟り澄ました気で、かかる「まさか」を素通りで、いいのか。いいのかも知れない。いいわけが、無いのかも知れない。

おいとまをいただきますと戸をしめて出てゆくやうにゆかぬなり（ ）は

現代が誇りうる詩人齊藤史のこの一首の短歌に、あえて、漢字一字を虫食いにして提出してみる。どこでどの年代の人たちに聞いても、「死」といれる人が多く、「生」と完うする人数を大きく超える。だが原作は「生」であり、そうでなくてはならない。そうでなくてはならない、そのところを、必死に求めている人に対し、ただお高く黙りこくりに、生きたことばを見失っている宗教者では、やはり仕方が無いと思う。

「死」を語れとは求めない。「よく生きて行く」ために、積極的な「生」のために語って欲しいし、「安心の道」を生かして欲しい。そういうことを問うのが浅いなどと、へんに微笑なされては苦笑するのである。

死は自然である。そう古人も覚悟していた。「自然」じねんのことあらば、と、覚悟していた。覚悟とは大黙ではあるが、愚痴のともがらにも、死は訪れる。予告なく訪れもする。しかもわれわれ凡俗は、さきの三首にも共通していたが、死を、「遊び・あそび」の連れのように口にかけていることが、あまりに多い。「まさか」と思っているいちばんの相手が「死」なのだ、私も、例外ではない。無意識の不安に、そのようにして堪えているのだと、だが、どれほどの宗教者は分かってくれているのだろう。神に縋れ、仏を頼め。それで済む、いや、それしか無いということか。

難行・苦行の重荷をおろしてよいと初めて教わった人々の嬉しさ、いかばかりであったかと、それは察している。感じてもある。

それにもかかわらず、現在只今の時代には、ただ「縫り」ただ「ひたすら頼む」ということこそが、最も難しい「難行」に相当している。それが現実なのである。「現代」を呼吸し理解しない昔ながらの説法では、所詮通るまい。そこが、どうなっているのかと不安に堪えず、不信も招いているのではないのか。

「人間なんだもの」と口にしてしまう人間的な弱みを、肯定も否定もできない宙吊りにされたまま、かなり深刻に不安に生きていて、それでもどうあっても「おいとまをいただきますと戸をしめて出てゆくやう」には行かない。それをまるで「まさか」とばかり、悟った顔で黙りこまれては、有り難くも何ともないのである。

はた こうへい

昭和10年、京都市生まれ。同志社大学美学芸術学科卒。昭和44年小説「清経入水」で第5回太宰治賞受賞。平成3年東京工業大学教授。平成8年同退職。現在、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会会員。著書に「みこりの湖（つみ）」、「冬祭り」、「京都感覚」、「嵐山」、「死なれて・死なせて」、「親指のマリア」など、エッセイ、評論集、小説多数。すべてを「秦恒平・湖の本」に収め、継続刊行中。

浄土の広場

FORUM

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

句会便り

オクンチ、
あるいはテレオクンチ
という句会

パソコン通信、Eメールなど情報通信機器を駆使した句会が盛んであるという。

そこまでは付いていけない、という人でもファックスを利用した句会なら出来ると考えるのではない。いまや電話と同じように使われるファックスというもの。何より白い紙に黒い文字で俳句が載っているのが嬉しい。当番の人の苦心の編集のあとがしのばれて、しみじみとした俳句の楽しみが湧いてくる。北海道から沖縄から、あるいは外国からだって参加できる句会。

今回、ここに紹介するのは、国立の植田規夫さん提唱のファックス句会。九日、十九日、二十九日と「九」のつく日に開催されるのでとりあえず仮の名前を「オクンチ」あるいは「テレオクンチ」と呼んでいるという。

やり方は簡単である。「九」のつく日になると三句作り、植田さんの所にファックスする。翌朝、参加者の句が全部載ったファックスが戻って来る。掲載句は無記名になっていてそこから規定の句数を選出し、短評を書き添えてまたファックスで送り返す。その翌日選句結果、作者、短評が送られて来る、というわけである。当番の人は大変だが植田さんは朝の七時から八時まで、仕事に入る前の一時間で全部済ませてしまうので別に苦にならない、という。

今回、ここに紹介するのは、十月九日の句会である。九が金曜日、十日が休日、十一日が日曜日にたまたま当たって、参加者は優雅な連休の過ごし方をしたようである。

九の付く日のファクス句会

「テレオクンチ」

第3回・九八年十月九日(金)

〔6点句〕

それよりも深夜南瓜に会うのです 暮鴉

◎十四郎◎等◎裕◎吾郎◎由季◎勝之

■「答」は必ず「問」という前提を待つものだが、問われもせぬのに答えをほぐらかすとは…(十四郎) ■南瓜って頑固そう。だから面白いのかな。武者小路実篤もびっくり(等) ■この思わせぶりがいい(裕) ■審査員特別賞系(吾郎) ■陽気なハロウインのおばけがいるみたい(由季) ■あつ、俺も最近ちよくちよく会います。「それよりも」がすごくいいなあ。それよりもの「それ」って何の話だったのかねエ(勝之) ■私も会います(暮鴉)

セロファン月の懐に指でつぼう 吾郎

◎十四郎◎啞々砂◎等◎裕◎由季◎栗

■少年趣味だが楽しい(十四郎) ■この指でつぼうの詩人にトレンチコートを着せるか、ルバシカを着せるかでガラリと風景が変わる(啞々砂) ■バーン(栗) ■二段切れたからいいのかなあ。きれい(裕) ■大人の童話。足穂的世界はイヤな時もある(等) ■この手のモチ1つのは絶対にとらない。今後、もつといいのが出てきてもとらない。もうすこしでとりそうになったけど(規夫) ■方向が直線上にしかない(暮鴉)

〔5点句〕

新米に両手くぐらせ一人の日 菊野

◎暮鴉◎吾郎◎由季◎栗◎勝之

■団地妻の午後(吾郎) ■指の間をすべり落ちる官能的な感触を想像した(由季) ■久しぶりに俳句を見た(暮鴉) ■真新しい糠の匂いと冷やとした感触。今日は自分のためだけにご飯を炊こう(栗) ■妻の帰りをずっと待ちたり(裕) ■人に言えないとんでもない読み違えて、とり落とした句。残念(規夫) ■「泥の河」やね、「お米つてすこくぬくいんや…」ってか(勝之)

花野にて老婆の頭放たるる 等

◎裕◎暮鴉◎由季◎規夫◎勝之

■恐いてすねえ。出会いたくない景です(裕) ■映画のワンシーンを
見てるようだ(由季) ■こわい(暮鴉) ■花野ではなく、そのへ
んてよく見ます。「花野」としたところ、作者のやさしさだと思いま
す。勉強になりました(規夫) ■老婆はアルツハイマーでもあろう
か。花に囲まれた幼児のような笑みを浮かべている。そのとき後方
から侍姿の三船敏郎突然登場。抜き放った業物で一刀両断。頭を失
った老婆の胴体から血柱吹きあがる(もちろんモノクロ黒沢の『用
心棒』のごとく) という映像が頭にこびりついちゃって、どうにも
消えてくれません(勝之)

〔以下、順不同〕

長き夜クローン羊に見つめらる 啞々砂

◎栗

■あの円らな瞳の凝視に相応しい季語(栗) ■いやン、エッチ!(暮
鴉) ■肉屋の顔をじっと見つめる(裕)

鯖猫はこし餡のごと眠る良夜かな 勝之

◎裕◎由季◎栗

■いい夜だなあ(栗) ■そういう風に眠るんだな。にしても、良く
伸びる餡だ(裕) ■体ごととろけるかのようできもちよさそう(由
季) ■こし餡のごとく眠れり良夜かな、じゃだめ?(暮鴉) ■俳句
系新体詩。気になるんです。勝ちやんかなー(等)

秋の寺自転車泥棒花泥棒 由季

◎菊野

■にぎわいがあつていいな(暮鴉) ■下着泥棒みんな泥棒(裕)

天津甘栗一列横隊号令す 十四郎

◎暮鴉

■かわゆい(暮鴉) ■八路に下りし日本兵らし(裕)

ずん胴な女と暮らす星月夜 菊野

◎由季

■ホツとするような絵画的な幸福感がいい(由季) ■できれば「く

びれ」もほしい(暮鴉) ■自分の足の長さ忘れて(裕)

ひやひやと小さき人の腕時計 規夫

◎菊野◎十四郎◎等◎裕

■コメントを付けなくなる面白さ(等) ■なんか平凡だけど、まあ、いいかと(裕) ■難解(暮鴉)

電球に魚が栖みたる雨の月 裕

◎十四郎◎啞々砂◎等◎勝之

■策にはまる快感(十四郎) ■最近電球ついてません?でも好きだな、鈴木翁二の世界を彷彿とさせる(勝之) ■好きな句ですが「栖みたる」がすこしく気になるんですけど。もつとサラつと言ったらダメなんでしょうか…(啞々砂) ■実は甘ったるい句なんです。コレが(等) ■こんな電球、私はイヤだ(暮鴉)

鳳仙花穴でつながる上と下 等

◎菊野

■熟年夫婦の夜の生活のことでしょうか(暮鴉) ■飯は上から、あとは言えない(裕)

体温計びびつと鳴って夜の桃 由季

◎菊野◎十四郎◎啞々砂◎裕

■有名な「夜のお菓うなぎパイ」というのがありますが、「夜の桃」はエロティック。あーびつくりした(啞々砂) ■「夜の桃」は三鬼の句集であつたか(十四郎) ■なんか平凡だけど、まあ、いいかと(裕) ■悪いところは別がない(暮鴉) ■クロウト筋はとらないと思う。基本がなっていないから。でも、私は「いい」と思った。季語の取り方が。でも、とらない。家庭の事情ざーんす(規夫)

たそがれて蟬鳴いまだ揺れやまず 裕

◎啞々砂

■作者はずつとここにいたのだろうか(啞々砂) ■未整理な感じがいい(暮鴉)

こぎれいな家庭作りて曼珠沙華 菊野

◎十四郎◎吾郎◎規夫

■花は毒のたとえである(十四郎) ■うあードロドロしてるう(吾郎) ■この季語でめずらしく個性的な句だ(暮鴉) ■憎々しげに愛

をうらやむ(裕) ■いつとき世界一のバンドだったトーキングヘッズにOpen in a Lifetimeという曲がある。同じメッセージだ。これは俳句でロックしている(規夫) ■くすぶった憎悪。詩ではありません(等)

恐竜の深く眠れる無月かな 栞

◎啞々砂

■恐竜の眠りは深すぎる。ホント、ふかーいのだ。もう一度と起きない。死んでいるとも言(啞々砂) ■形が美しい(暮鴉) ■浅く眠るはウーパールーパー(裕)

天井の蜘蛛らの儀式雨月なり 啞々砂

◎等◎暮鴉◎規夫

■決まり過ぎて、後が無い…って感じ。コギヤルにわかるか(等) ■面白けれど、上を向いたつきりになるのが「？」(暮鴉) ■虫のころはちとわかるまじ(裕) ■蜘蛛の動きはたしかに儀式を感じさせる。人類学者はこの句とりますね。絶対(規夫)

私だけぎつくばらんに芒散る 暮鴉

◎等◎吾郎

■これ、女性の句だぞ、きつと。「ぎつくばらん」って語呂、本当にぎつくばらんとすね(等) ■深川芸者の心意気(吾郎) ■私だけ？私だけ？(暮鴉) ■二の句をつけぬ浮いた私か(裕)

秋深し卵の化石ゴロゴロと 栞

◎暮鴉◎規夫

■ツルツルとだつたらだめかなあ(暮鴉) ■煮ても焼いても食えぬ哀しさ(裕) ■「ゴロゴロ」って、あなた、もうすこしなんとか。でも、このプレイスタイルを断固支持する。好きなタイプの選手。なんか、ドカンとした言葉の使い方。物理がドーンと伝わるから気持ちいい(規夫)

砒素殺人乗飯ぼろぼろぼろと 暮鴉

◎裕

■ぼろぼろぼろぼろに実感があるが、安い。ま、句のものだから(裕) ■フム(暮鴉)

秋桜とびつこのママの偏頭痛 規夫

■差別用語のちと危うかし(裕) ■ツベアかスリーカードかたのブラフか(暮鴉)

南天の腥きほどに実をつけて 勝之

◎吾郎◎葉◎規夫

■「に」の価値(吾郎) ■「腥き」の読みがわかったとき鳥肌が立った(葉) ■目にも耳にも美しき表現。凄いなあ(葉) ■真面目さがいい(暮鴉) ■漢字は面白い。無教養な私が読むと、句の意味とは別に「南の空の月と星」が一緒に見えてくる。難しい漢字にはルビをふってほしい(規夫) ■発句であればこれがはつはな(裕)

二の腕の白さ他言無用の秋 吾郎

◎菊野

■秘密主義(暮鴉) ■グアムもハワイも遠きまぼろし(裕)

数えぬ日ありて十月三十二日 十四郎

◎吾郎◎規夫

■「に」生まれた奴を私は知っている(吾郎) ■切りは全員辛い(暮鴉) ■そりや理屈だといわれ納得(裕) ■なんて前半を「数える／

数えぬにしたのだろう。違ふものがはしかつたぞ「十月三十二日」は、今月になって読んだもの、買ったCD、見聞きした話ぜんぶ合わせてベスト3くらいに「いい」と思ったのに。でも、とる(規夫)

肢一本残し蟋蟀いなくなる 規夫

◎菊野◎啞々砂◎暮鴉◎勝之

■また生えるからいいんだよね、一本くらい。でも困る残されても(啞々砂) ■いや、生えんてしよう(当番) ■発見がある(暮鴉) ■地雷を踏めば人もおんなし(裕) ■いや、人はいなくなれない。難儀なことに(当番) ■我が家の便所にも肢一本残して…あれは便所コオロギ。ものすげえ恐いんです。あのカマドウマっちゃう生き物(勝之)

深爪の半月曲線の良夜 吾郎

◎由季

■単語四つてフォーカード(暮鴉) ■砒素を飲んだら筋目出るなり(裕)

影までもなお黒々と揚羽往く 勝之

◎十四郎◎啞々砂◎朶

■「なお」が短歌的と思うのは何てだろう（啞々砂）■難しい方角

（暮鴉）■ついでに日触みんな真つ黒（裕）■「までも」「なお」が短歌的、勝っちゃかなー。（等）

胡桃完全なまま取り出し置く 十四郎

◎朶

■決してすぐに口に入れてはならない（朶）■志が高い、と思う（暮鴉）■「を」を入れたらただの説明（裕）

木犀の今日は家まで攻めて来た 朶

◎等

■そう、この花の匂いは帝国主義的ですぞ（等）■感じはとてもない（暮鴉）■わがマンションは二階とまりぞ（裕）

回教の如く校庭冷えにけり 等

◎吾郎◎勝之

■モスクってなんか暑い（吾郎）■ラマ教なら理解できる（暮鴉）

■母の仏壇・父の神棚（裕）■キリスト教よりはるかに暑いと思う

んですけど、ま、戒律とかタブーとかを思い合わせれば（勝之）

水槽に泡のみ動く秋しぐれ 裕

◎菊野◎暮鴉◎規夫

■「秋しぐれ」じゃなければ、もったいいい（暮鴉）■水槽って小さくてチンケなものほど、じつと見入ってしまう。泡しか見えなくてもすつと見てしまう。一つの事象をこうして取り出してくれるだけでも充分です、俳句は（規夫）

不条理な種なし柿に三時くる 啞々砂

◎勝之

■こない、と思う（暮鴉）■あの大ぶりの種があったはずの部分の果肉を食べる時って、いつも不思議な感じがした。種なしブドウとかスイカにはない違和感。納得のいかなさ（勝之）■おやつとなつて喰われる哀しさ（裕）

こんなのが日曜日の朝送られてくる楽しさ。分つていただけるだろうか。あけてビックリという言葉があるが、この場合ファックスだけに出てきてビックリである。

第三回浄土誌上句会のお知らせ

季題 冬木立

塩鮭

自由題

×切・十一月二十日

発表・『浄土』新年号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

- いずれの題とも何句出しても可
- 特選各1名・佳作各3名

応募方法

葉書に俳句(何句でも可)を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

☆まちがいは7ヶ所あります。



まちがいがし

答えは45ページにあります。

事務局便り

●新規会員紹介 購読会員

福岡	北九州市	三浦哲夫
埼玉	羽生市	栄新寺
栃木	喜連川町	専念寺
奈良	香芝市	来迎寺
福岡	大木町	清浄院
静岡	静岡市	土屋しげ子
神奈川	相模原市	極楽寺
宮城	山元町	渡辺精一

敬称略

●読者プレゼント

『まんがで攻略二字熟語なんて恐くない!』

今月は、まちがい、すべて見つかりましたでしうか?。そろそろお馴染みになって参りました、パズル「まちがいがいさがし」の作者、藤井ひろし氏の、(実業之日本社まんがで攻略シリーズ)の学習まんが『まんがで攻略二字熟語なんて恐くない!』(実業之日本社・刊1000円+税)を浄土の読者2名にプレゼントします。藤井氏はこの他に同社の『四字熟語なんて恐くない』『慣用句なんて恐くない』『理科天気予報はおもしろい』等の本

の漫画を担当されています。小学生から中学生向けの本ですが大人が読んでもなるほど思われる内容、ご家族でご覧になっては?。



またパズルの感想もお聞かせください。

あて先▼〒105-0011

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

『月刊浄土』編集部読者プレゼント係



月影の姿はつきり神無月

岱潤

今年八月に和歌山県園部で起きたカレー毒物混入事件。そしてそれ以来新潟、長野など連鎖反応のごとく毒物の混入といういわれしい事件が全国各地に飛び火して、一時期日本中が人間不信の雰囲気になった。

我が家に手伝いに来ている若者は、カレーを食べること自体怖いと言ひ、我が家を出したカレーにさえげんな顔をした。

和歌山県の事件は解決に向かっていているようにも思われるが、それ以外の事件はいまだ犯人像すら浮かんでこない。日本はいつた国になつてしまつたのだろうか。

先日清潔病に悩む若者が電話をしてきた。電車の吊り革もつかめず、外のトイレで落とした時計ははめることもできず、外食は一切できない。そんな生活に疲れ果てての電話である。

自動車の内装からボールペンに至るまで抗菌されるのが常識化し、食品の賞味期限はより一層厳しくなつた。無菌状態にすることが問題の解決とはとても思えないのだが。・・・

経済が暗い影を落とし、恐慌の言葉さえテレビでささやかれるようになった。人々の不安要因は増大し、気温の低下がより一層寂寥感を駆り立てる。人間が、世の中が信じられなくなつた時代こそ、本来の自己を取り戻すため仏をしつかりと見つめてゆきたいと思う。

陰を追っているのは光に背を向けている証拠で、光りに向かつて歩き出せば、陰は後に行くはずである。そう信じて歩いてゆきたい。

(岱潤)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

井原法正

佐山哲郎

岡川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土

六十四巻十一月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十年十月二十五日
発行——平成十年十一月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社シータイイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所——法然上人鑽仰会

電話〇三(三三三七八)六九四七

FAX〇三(三三三七八)七〇三六
振替〇〇一八〇八二二八七

これが、
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

サッポロ生

黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。①

●ご協力をお願いし自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害ならせ



民家近し、静かに



足元注意



低切りあり



非常口



注意

住友海上

代理店

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわるな



破れ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする

住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)